

第2章 第2期(夏季休業期)における勤務実態

1. 第2期の調査協力校の概況

第2期の調査期間は、平成18年7月31日(月)から平成18年8月27日(日)までの4週間である。

まず、第2期の調査協力校の時期的特徴について紹介する。

第2期において回答のあった339校すべての小学校・中学校が、調査期間の前半に児童・生徒の夏季休業期(以下、「夏季休業期」)を含んでいる。第1章でも述べたように、夏季休業期には通常の授業はなく、登校する児童・生徒の数も少ない。そのため、夏季休業期における教員の業務は、通常期とは質も量も異なっていると考えられる。そこで第2期については、調査協力校の夏季休業期の終了日の情報をもとに、データを通常期と夏季休業期の2つの時期に分けて分析を行った。

なお、調査協力校における夏季休業期の終了日の分布は表2-2-1のようになっている。すべての調査協力校において、調査期間は夏季休業期から始まっていたため、ここでは夏季休業期の終了日についてのみ紹介する。

分布をみると、8割の学校で第2期の調査期間が終了する8月27日(日)以降に夏季休業期が終了する。8月25日(金)が夏季休業期の最終日である学校も、土日がつづくため、8月27日(日)以降に夏季休業期が終了する場合と実質的にはほぼ同じである。そのため、第2期の調査協力校のうち8割を超える学校では、第2期の調査期間がすべて夏季休業期となっている。残る1~2割の学校では、調査期間中に1~12日間の通常期を含んでいることになる。

本章では、夏季休業期の教員の勤務実態の特徴を検討するため、第2期のうち夏季休業期について報告を行うこととする。

表2-2-1 第2期の調査協力校における夏季休業期の終了日

夏季休業期 終了日	8月15日 (火)	8月16日 (水)	8月17日 (木)	8月19日 (土)	8月20日 (日)	8月21日 (月)
	1	1	3	2	15	4
	0.3	0.3	0.9	0.6	4.4	1.2
8月22日 (火)	8月23日 (水)	8月24日 (木)	8月25日 (金)	8月27日 (日)	8月28日 (月)	8月29日 (火)
3	8	13	11	16	14	11
0.9	2.4	3.8	3.2	4.7	4.1	3.2
8月30日 (水)	8月31日 (木)	9月1日 (金)	無回答・ 不明	計		
11	222	1	3	339	校	
3.2	65.5	0.3	0.9	100.0	%	

2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

(1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず、第2期(夏季休業期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-2-2)。

小学校では、残業時間量は平均で21分、持帰り時間量は平均15分、これらを合わせた時間の平均は36分である。

中学校では、残業時間量は平均33分、持帰り時間量は平均14分、これらを合わせた時間の平均は48分である。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも12分長い。しかし、持帰り時間の平均は小学校と中学校においてほとんど差はない。

次に、第2期(夏季休業期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態の状況について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-2-3)。

小学校では、残業時間は平均で7分、持帰り時間は平均で34分、残業時間と持帰り時間を合わせた時間の平均は41分である。残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校の教員は基本的に休日には学校で業務を行っていないといえる。ただし、休日の持帰り時間については、中央値と平均値に30分以上のひらきがあることからわかるように、休日に持帰り仕事をする人の間では時間量の差が大きい(表2-2-3)。これは後の図2-2-4からも確認できる。

中学校では、残業時間と持帰り時間はほぼ同じで、残業時間は平均44分、持帰り時間は平均47分、これらを合わせた時間の平均は1時間32分である。また、残業時間の中央値が0分である一方、平均値は40分以上であることから、中学校では残業を行う教員と行わない教員の差が大きいことがわかる。これは第2期(夏季休業期)の特徴である。また、休日の残業時間と持帰り時間の中央値と平均値に40分以上ものひらきがあることからわかるように、中学校では休日に残業や持帰り仕事を行う人の中で、時間量の差が大きい(表2-2-3)。これは後の図2-2-3や図2-2-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、休日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも37分長い。持帰り時間については、中学校の方が小学校よりも13分長い。小学校と中学校それぞれの残業時間・持帰り時間における業務内訳については、後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために休日の残業時間が長くなると考えられる。

以上、第2期(夏季休業期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間が持帰り時間より6分長い(表2-2-2)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも27分長い(表2-2-3)。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも19分長く(表2-2-2)、休日においては、残業時間と持帰り時間はほぼ同じ長さである(表2-2-3)。持帰り時間については、勤務日より休日の方が30分ほど長い(表2-2-2、表2-2-3)。

小学校・中学校いずれにおいても、第2期(夏季休業期)は、他の時期に比べて正規の勤務時間以外の業務時間が短いといえる。複数の調査期間の比較については、詳しくは後の第7章で述べる。

表2-2-2 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	21分 〔10分〕(0.516)	15分 〔0分〕(0.562)	36分 〔20分〕(0.797)
中学校	33分 〔21分〕(0.670)	14分 〔1分〕(0.500)	48分 〔32分〕(0.870)
全体	28分 〔15分〕(0.613)	15分 〔0分〕(0.529)	43分 〔27分〕(0.843)

[]内は中央値、()内は標準偏差を示す。

表2-2-3 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	7分 〔0分〕(0.409)	34分 〔0分〕(1.080)	41分 〔13分〕(1.172)
中学校	44分 〔0分〕(1.362)	47分 〔5分〕(1.398)	1時間32分 〔49分〕(1.950)
全体	27分 〔0分〕(1.087)	41分 〔3分〕(1.268)	1時間09分 〔26分〕(1.695)

[]内は中央値、()内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第2期(夏季休業期)の教員全体における残業時間量・持帰り時間量の平均に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。

そこで、第2期(夏季休業期)における教員一人あたりの平均残業時間量および平均持帰り時間量の分布をみたものが、図2-2-1から図2-2-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校と中学校の結果を検討していく。

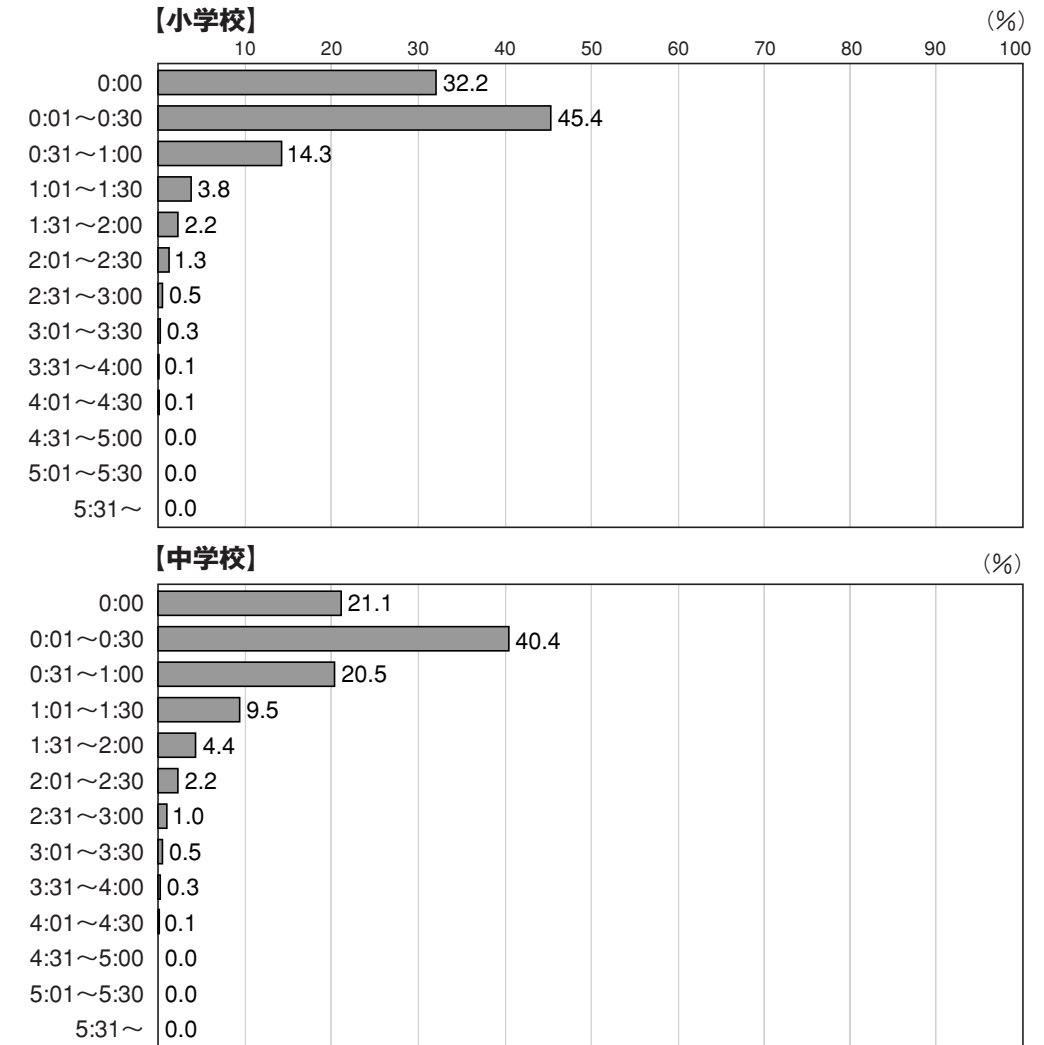
まず、第2期(夏季休業期)の勤務日における平均残業時間量について検討してみよう(図2-2-1)。

小学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が32.2%で、残業を行わない教員はおよそ3割である。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は45.4%、31分~1時間以下は14.3%となっており、およそ6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。残業が1時間を超える教員は1割に満たない。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が21.1%で、残業を行わない教員は2割である。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は40.4%、31分~1時間以下は20.5%となっており、6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、平均残業時間が1時間01分~1時間30分以下の教員は9.5%、1時間31分~2時間以下の教員は4.4%、2時間を超える教員は4%ほどである。

以上から勤務日に残業を行わない教員は小学校においてはおよそ3割、中学校においてはおよそ2割となっており、第2期には、通常期に比べて残業を行う教員が少ないことがわかる。一方で、およそ6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。また、小学校よりも中学校の方が、概して残業時間が長い傾向にあるといえる。

図2-2-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

次に、第2期(夏季休業期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-2-2)。

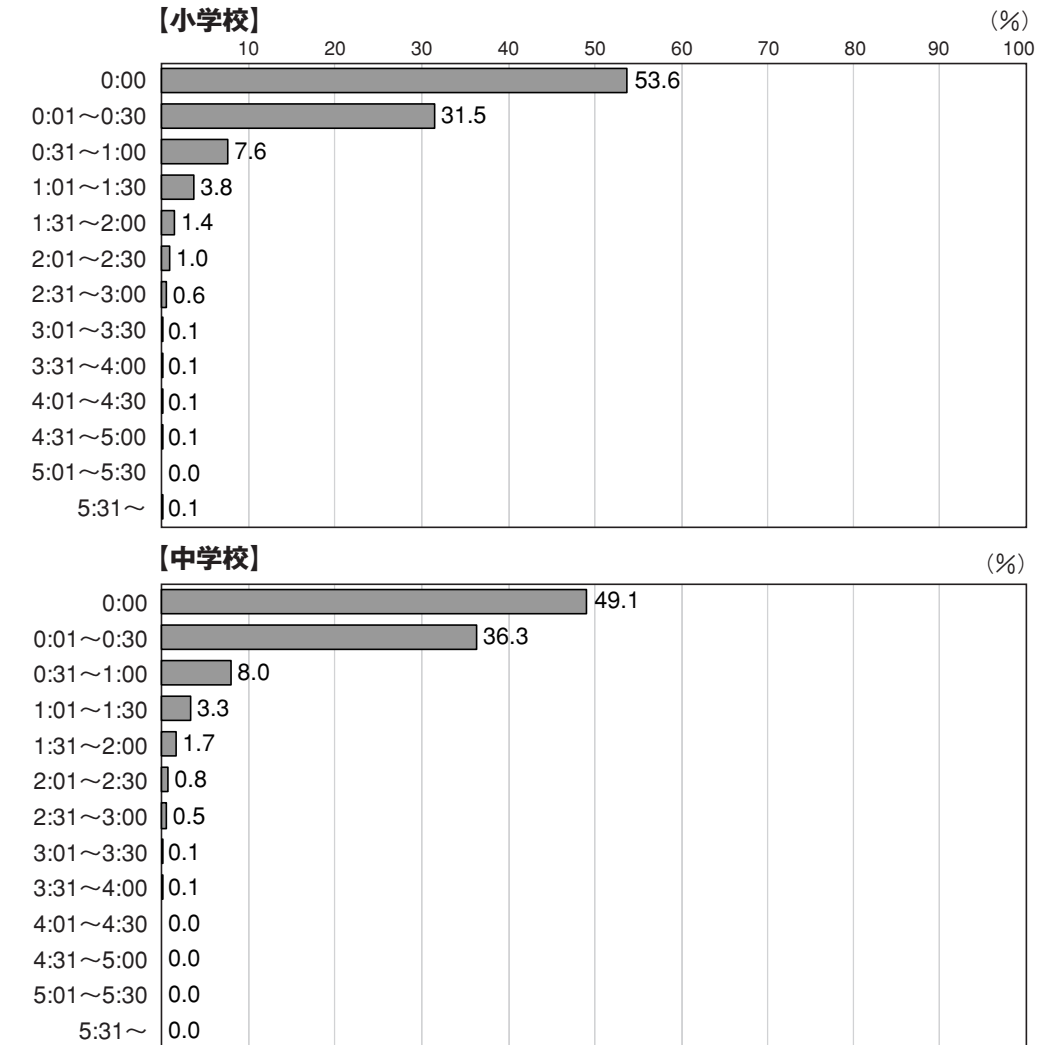
小学校の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が53.6%で、持帰り仕事を行わない教員は5割強である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は31.5%、31分~1時間以下は7.6%であり、4割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている。1時間を超える持帰り仕事を行っている教員はおよそ7%である。

中学校の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が49.1%で、持帰り仕事を行わない教員は5割弱である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は36.3%、31分~1時間以下は8.0%であり、4割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている。1時間を超える持帰り仕事を行っている教員は6.5%である。

以上、第2期(夏季休業期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では5割強、中学校では5割弱いる。また、小学校・中学校ともに、およそ4割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている。

第2期(夏季休業期)の勤務日の残業時間と持帰り時間の実態についてまとめると、残業をまったく行っていない教員は小学校においてはおよそ3割、中学校においてはおよそ2割となっており、小学校・中学校いずれにおいても、およそ6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-2-1)。持帰り仕事については、まったく行っていない教員は小学校では5割強、中学校では5割弱となっており、小学校・中学校いずれにおいても、およそ4割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている(図2-2-2)。

図2-2-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

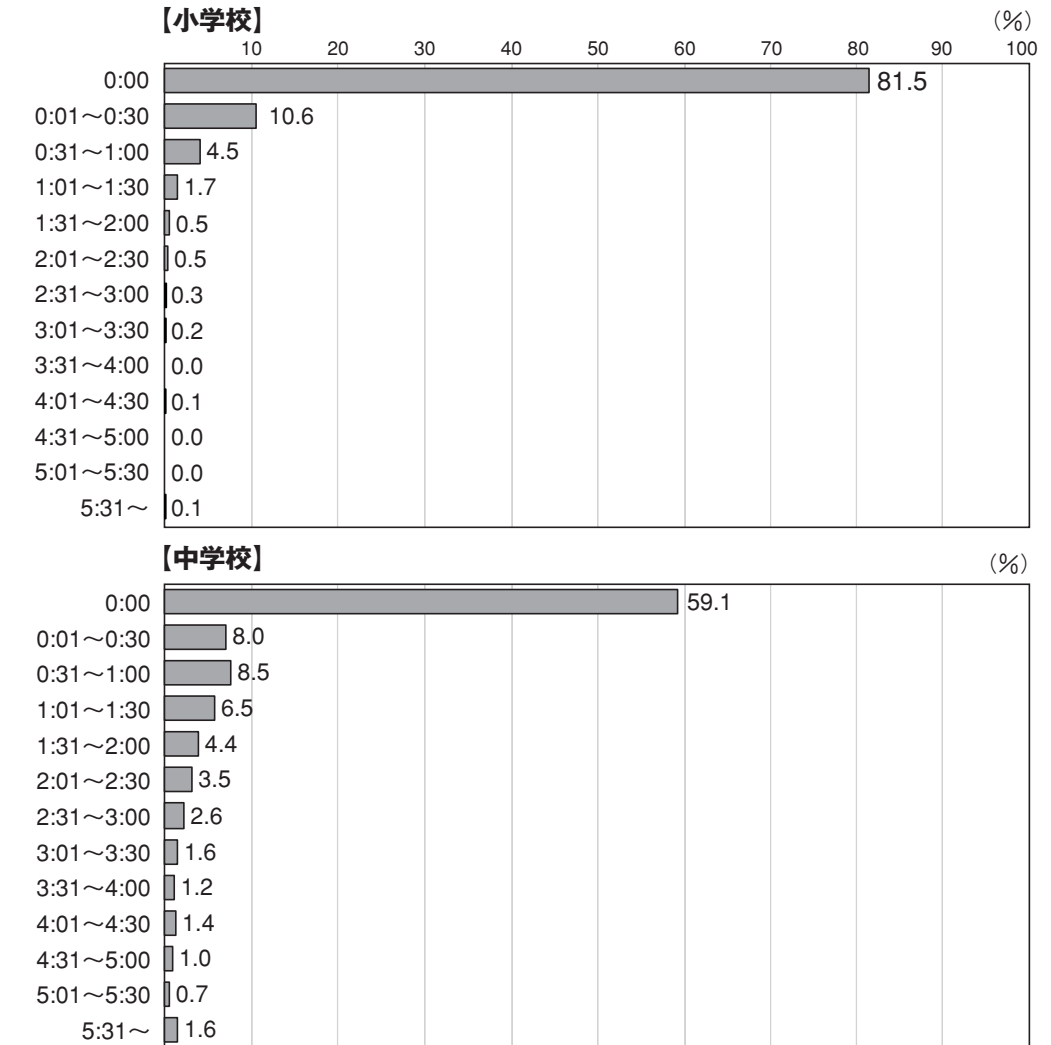
次に、第2期(夏季休業期)の休日における平均残業時間量について検討しよう(図2-2-3)。

小学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が81.5%で、勤務日(図2-2-1)と比べると、休日にはほとんどの教員が学校に出勤することはないといえる。1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員は約15%、1時間を超える残業を行う教員は約3%と、残業を行う教員も少ない時間帯に集中している。

中学校の休日の平均残業時間の分布は、0分が59.1%で、勤務日(図2-2-1)と比べると残業をまったく行わない教員は40ポイントほど増加する。しかし一方で、4割の教員が休日にも学校に出勤して残業を行っている。また、小学校に比べると、休日に残業を行う教員が多い。残業時間については1時間以下(0分をのぞく)の教員が16.5%、1時間01分~2時間以下の教員が1割、2時間01分~3時間以下の教員が約6%、3時間を超える教員は1割弱ほど存在する。この時間に行っている業務としては部活動などが考えられるが、実際に中学校の教員が休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において紹介する。

以上をまとめると、次のようにいえる。第2期(夏季休業期)の休日における平均残業時間について、休日に残業を行わない教員は小学校では8割、中学校では6割存在する。しかし、小学校では残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員が約15%となっており、残業を行う教員についても、その時間は長くはない。中学校においては、残業時間は教員間での差が大きいが、1時間以下(0分をのぞく)などの少ない時間帯を中心に分布している。

図2-2-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

次に、第2期(夏季休業期)の休日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-2-4)。

小学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が50.8%で、持帰り仕事をを行わない教員は5割である。これは、勤務日(図2-2-2)と大きな差はない。他方、休日でも5割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は1時間以下に集中している。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)の教員は19.5%、31分～1時間以下の教員は11.2%と、1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている教員は3割である。1時間01分～2時間以下の教員は1割、2時間を超える教員は1割弱である。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が48.2%で、持帰り仕事をを行わない教員は5割である。これは、勤務日(図2-2-2)と大きな差はない。他方、休日でも5割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は1時間以下に集中している。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)の教員は15.7%、31分～1時間以下の教員は10.8%と、1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている教員は3割弱である。1時間01分～2時間以下の教員は1割強、2時間を超える教員はおよそ1割である。

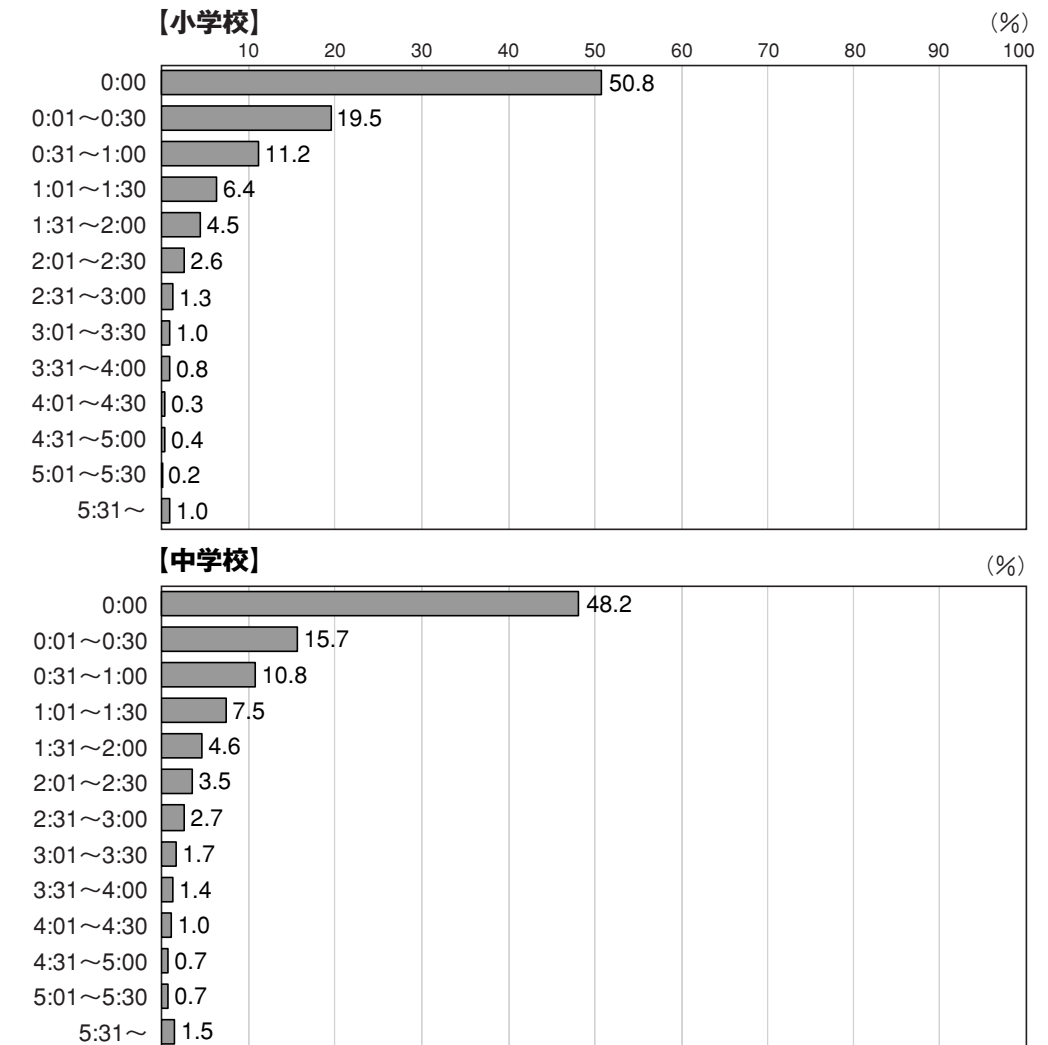
以上、第2期(夏季休業期)の休日の平均持帰り時間量については、休日に持帰り仕事をを行わない教員は小学校・中学校いずれにおいても5割存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、およそ3割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている。

第2期(夏季休業期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では8割、中学校では6割存在する。残業を行う教員についても、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員の割合が小学校・中学校いずれにおいても15%ほどであり、残業時間は長くはない(図2-2-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事をを行わない教員は小学校・中学校いずれにおいても5割ほど存在する。持帰り仕事を行う教員については、小学校・中学校いずれにおいても、1時間以下(0分をのぞく)に3割の教員が集中している(図2-2-4)。

以上から、次のことが指摘できる。

第2期(夏季休業期)においては、勤務日に残業を行っていない教員は小学校においては3割強、中学校においては2割強であり、小学校・中学校いずれにおいても、およそ6割の教員が1時間以下の残業を行っている(図2-2-1)。休日に残業を行う教員は小学校では2割、中学校では4割いるが、残業時間については、小学校・中学校いずれにおいても1時間以下(0分をのぞく)の教員が15%ほどと、長くはない(図2-2-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日(図2-2-2)と休日(図2-2-4)ともにほぼ5割である。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は4割が1時間以下(0分をのぞく)に集中し(図2-2-2)、休日の持帰り時間は1時間以下(0分をのぞく)に3割の教員が集中している(図2-2-4)。

図2-2-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第2期(夏季休業期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、業務の内訳を検討する。

第2期(夏季休業期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第2期(夏季休業期)の勤務日について検討しよう(表2-2-4、表2-2-5)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校において最も長いのは、その他の校務で4分である。小学校で2番目に長いのは事務・報告書作成で3分、つづいて学校経営が2分、学校行事が2分、授業準備が1分である。学校行事が上位に入っているのは、第2期(夏季休業期)の時期的特徴であると考えられる。中学校において最も長いのは部活動・クラブ活動で10分である。中学校で2番目に長いのはその他の校務で6分、つづいて事務・報告書作成4分、学校経営2分、授業準備1分となっている。ここから、小学校・中学校ともに残業時間における業務内訳は、事務的な業務が中心となっており、中学校ではこれに部活動・クラブ活動が加わるといえる。また、夏季休業期であっても、授業準備を行っていることがわかる(表2-2-4)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校において最も長いのは授業準備で4分である。2番目に長いのはその他の校務で3分、つづいて事務・報告書作成2分、学年・学級経営0分、学校経営0分である。中学校においても最も長いのはその他の校務で3分である。2番目に長い業務は授業準備で2分である。つづいて事務・報告書作成2分、部活動・クラブ活動0分、成績処理0分であり、事務的な業務が中心であるといえる(表2-2-5)。

次に、第2期(夏季休業期)の休日について検討しよう(表2-2-6、表2-2-7)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校ではその他の校務が最も長く1分、以下、保護者・PTA対応が1分、事務・報告書作成0分、学校経営0分、部活動・クラブ活動0分とつづく。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く33分、以下、その他の校務が2分、事務・報告書作成1分、保護者・PTA対応1分、学校経営0分とつづく。小学校・中学校いずれにおいても、保護者・PTA対応が上位に入っていることは、保護者・PTAにかかわる集会などが増える第2期(夏季休業期)の時期的特徴であると考えられる。また、小学校においても部活動・クラブ活動が上位に入っていることも、第2期(夏季休業期)の特徴であると考えられる(表2-2-6)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く9分、つづいてその他の校務が5分、事務・報告書作成が4分、部活動・クラブ活動が1分、校務としての研修が1分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く22分、つづいて授業準備が5分、その他の校務が4分、事務・報告書作成が3分、成績処理が1分となっている。小学校において校務としての研修が上位に入っていることは、第2期(夏季休業期)には通常の授業がないために研修が開かれることが多く、教員が研修を受ける時間をとることができるからだと考えられる(表2-2-7)。

表2-2-4 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	その他の校務	4分	部活動・クラブ活動	10分	部活動・クラブ活動	6分
2	事務・報告書作成	3分	その他の校務	6分	その他の校務	5分
3	学校経営	2分	事務・報告書作成	4分	事務・報告書作成	3分
4	学校行事	2分	学校経営	2分	学校経営	2分
5	授業準備	1分	授業準備	1分	授業準備	1分

表2-2-5 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	4分	その他の校務	3分	授業準備	3分
2	その他の校務	3分	授業準備	2分	その他の校務	3分
3	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分
4	学年・学級経営	0分	部活動・クラブ活動	0分	学校経営	0分
5	学校経営	0分	成績処理	0分	成績処理	0分

表2-2-6 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	その他の校務	1分	部活動・クラブ活動	33分	部活動・クラブ活動	18分
2	保護者・PTA対応	1分	その他の校務	2分	その他の校務	2分
3	事務・報告書作成	0分	事務・報告書作成	1分	保護者・PTA対応	1分
4	学校経営	0分	保護者・PTA対応	1分	事務・報告書作成	1分
5	部活動・クラブ活動	0分	学校経営	0分	学校経営	0分

表2-2-7 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	9分	部活動・クラブ活動	22分	部活動・クラブ活動	13分
2	その他の校務	5分	授業準備	5分	授業準備	7分
3	事務・報告書作成	4分	その他の校務	4分	その他の校務	5分
4	部活動・クラブ活動	1分	事務・報告書作成	3分	事務・報告書作成	3分
5	校務としての研修	1分	成績処理	1分	成績処理	1分

3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第2期(夏季休業期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

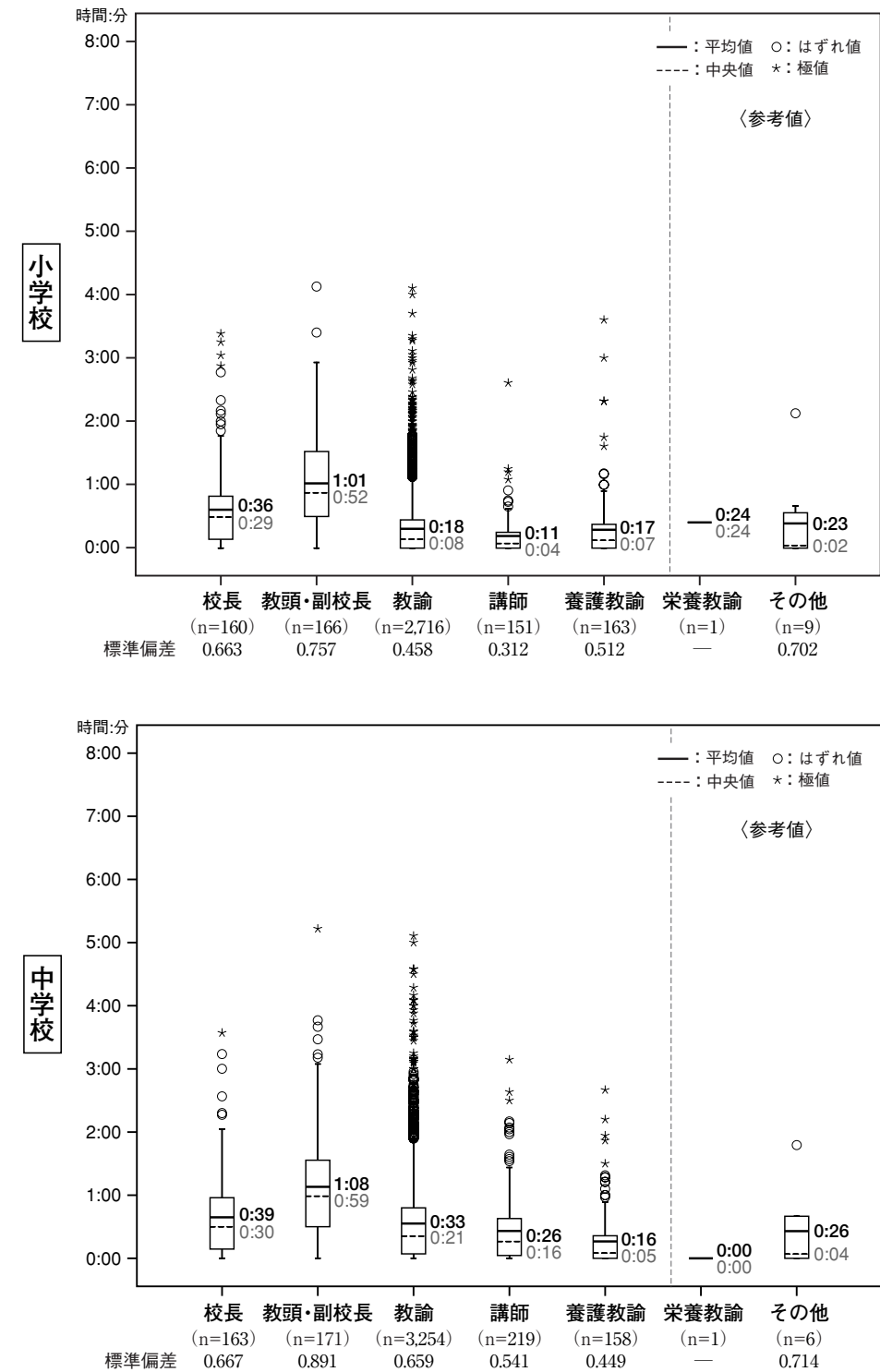
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間に処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り仕事として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについてみていこう。

第2期(夏季休業期)の勤務日における平均残業時間量は、図2-2-5の通り、小学校の教頭・副校長は1時間01分、中学校の教頭・副校長は1時間08分であり、他の職階に比べて圧倒的に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長は36分、教諭は18分、講師は11分、養護教諭は17分となっており、校長は他の職階よりも15~25分ほど長くなっている。中学校では校長は39分で、教諭は33分、講師は26分、養護教諭は16分となっており、校長は他の職階よりも5~25分ほど長くなっている。

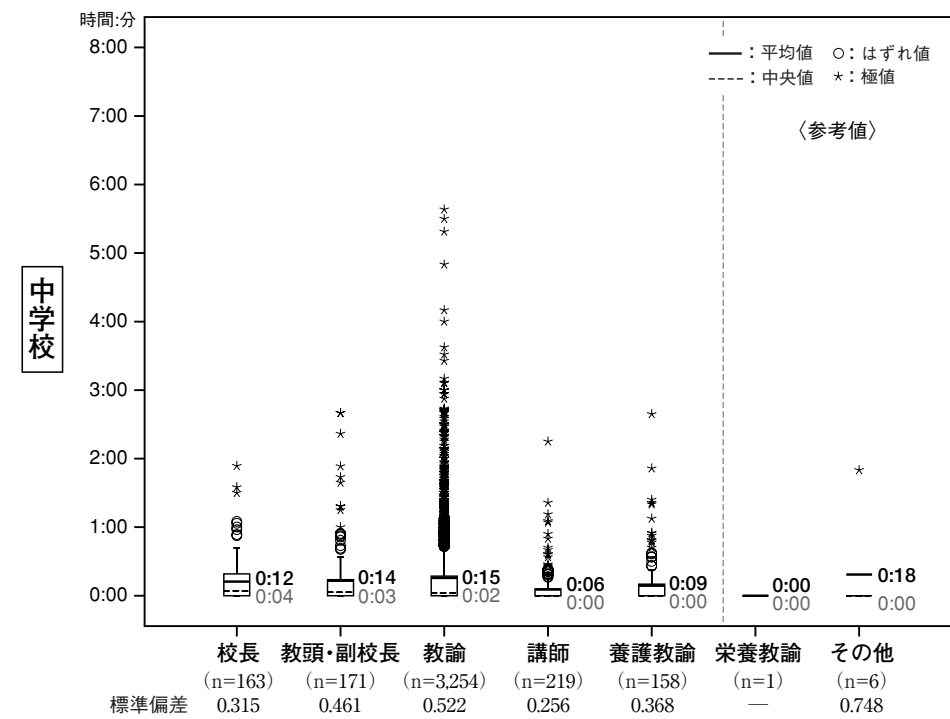
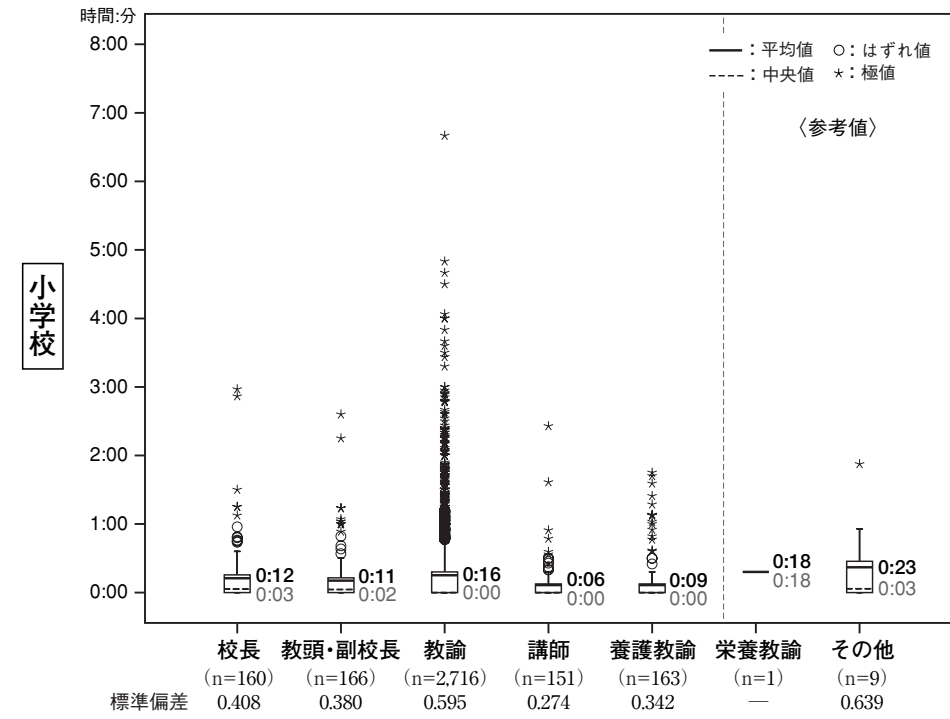
図2-2-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)



第2期(夏季休業期)の勤務日における平均持帰り時間量は、他の時期に比べて全体的に短くなっている。職階別にみると、図2-2-6のように、小学校・中学校とも教諭で最も長くなっている。しかし、教諭と校長や教頭・副校長との差は大きくはなく、小学校では、教諭16分につづくのが校長12分、教頭・副校長11分である。中学校では、教諭15分につづくのが教頭・副校長14分、校長12分である。

図2-2-5と図2-2-6の比較から、小学校・中学校とも勤務日においては、学校では教頭・副校長が長く残業を行うが、自宅での持帰り仕事の量には、講師・養護教諭をのぞき職階による違いはあまりないといえる。

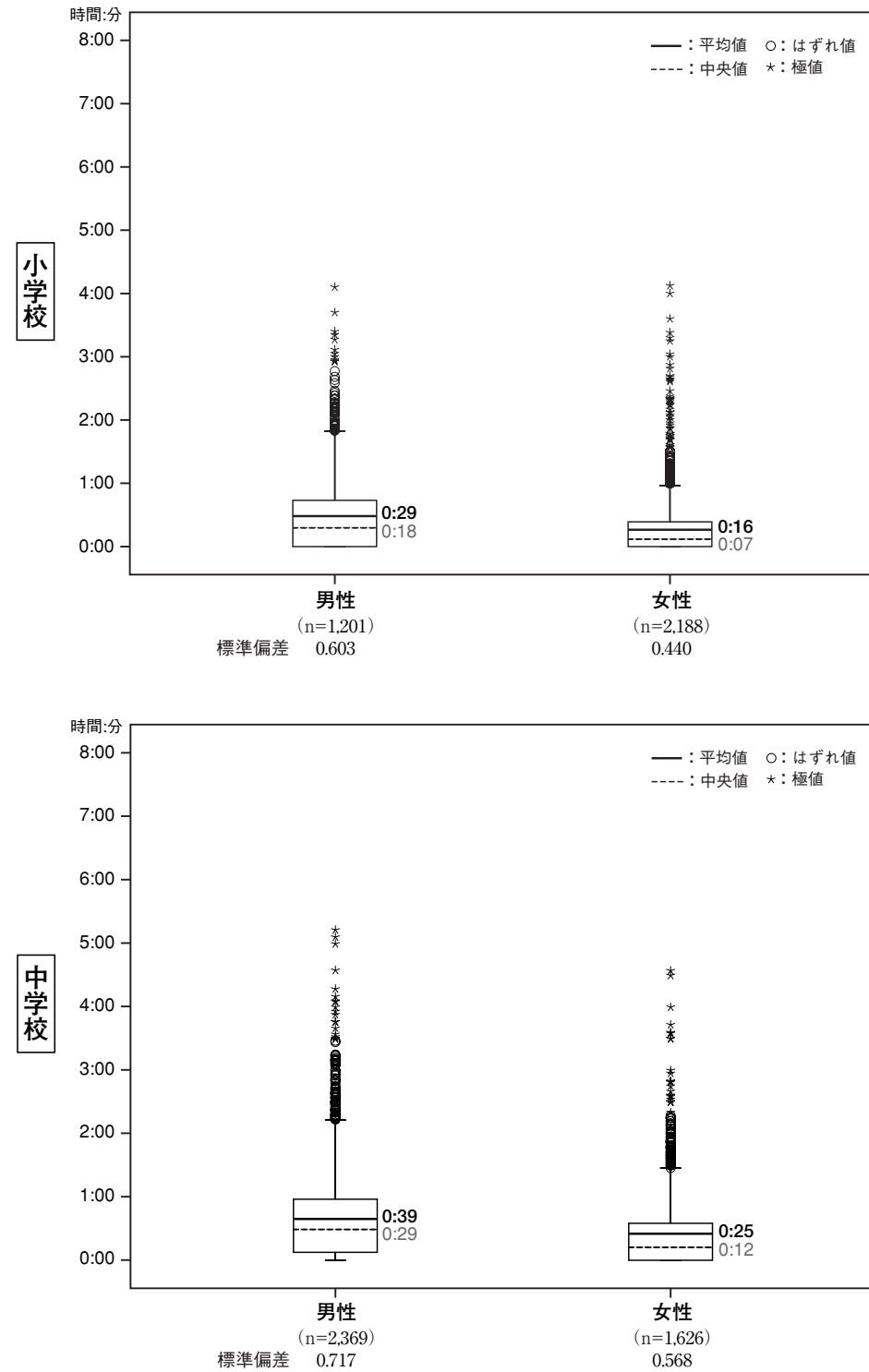
図2-2-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)



次に、性別ごとに平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。

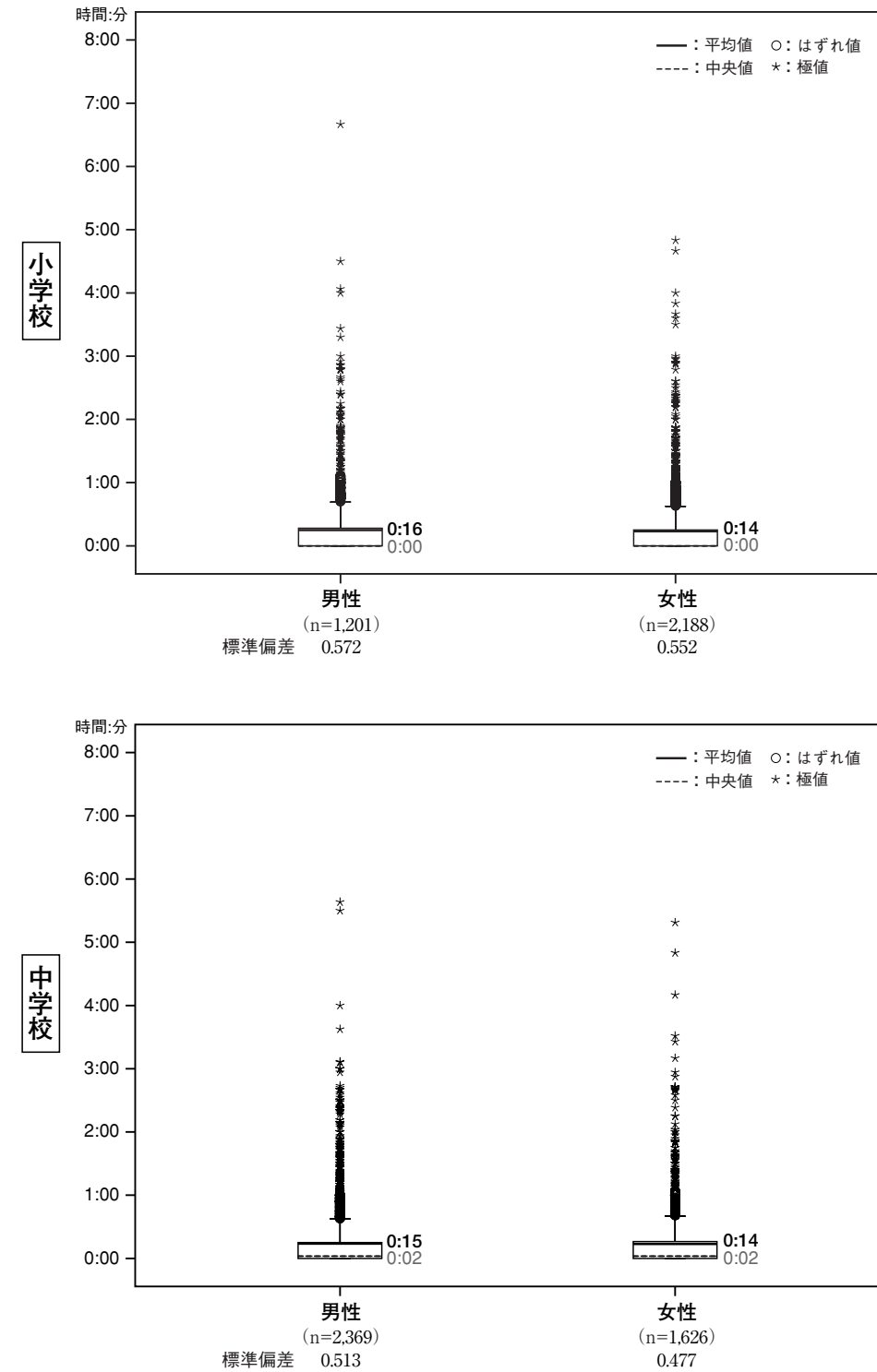
第2期(夏季休業期)の勤務日における平均残業時間量は図2-2-7の通り、小学校・中学校ともに男性教員の方が女性教員よりも15分ほど長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 29分、女性教員 16分、中学校:男性教員 39分、女性教員 25分)。

図2-2-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)



これに対して第2期(夏季休業期)の勤務日における平均持帰り時間量は図2-2-8の通り、小学校・中学校いずれにおいても男性教員と女性教員の差はほとんどない(平均値は次の通り/小学校:男性教員 16分、女性教員 14分、中学校:男性教員 15分、女性教員 14分)。

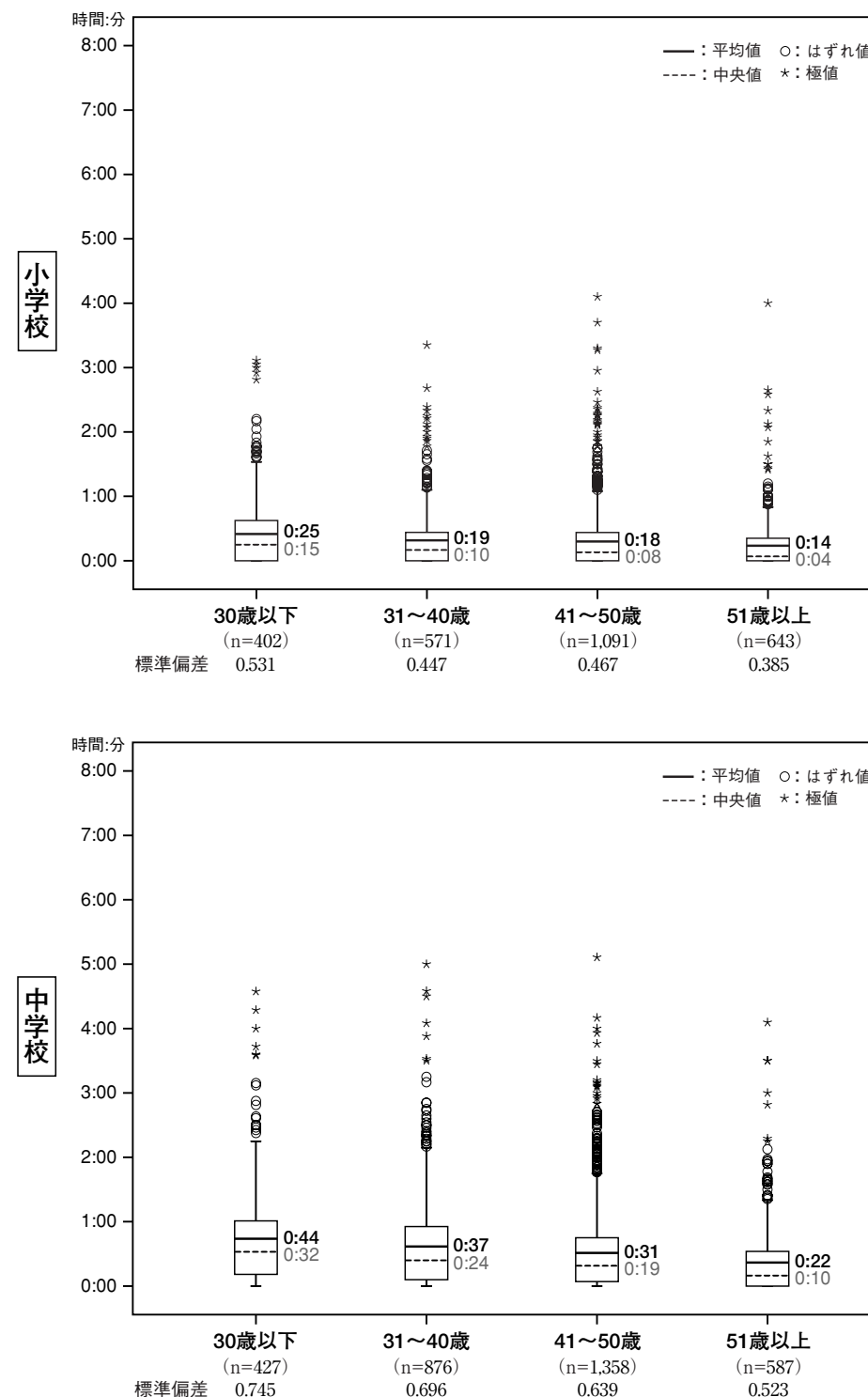
図2-2-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)



最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態を検討しよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響も考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢別で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

第2期(夏季休業期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校ともに30歳以下で最も長く、小学校では25分、中学校では44分である(図2-2-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて平均残業時間は若干減少する。小学校では31~40歳で19分、41~50歳で18分、51歳以上で14分である。中学校では31~40歳で37分、41~50歳で31分、51歳以上で22分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮されることや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任されることなどが考えられる。

図2-2-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第2期(夏季休業期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校と中学校いずれにおいても、年齢によって大きな差はないことがわかる。30歳以下では小学校13分、中学校12分、31～40歳では小学校17分、中学校16分、41～50歳では小学校18分、中学校16分、51歳以上では小学校14分、中学校15分である(図2-2-10)。

図2-2-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)

